

令和5年度の水稲高温障害対策について

～今後の水管理～

過去、平成22年産米において、登熟期の高温障害により白未熟粒（心白粒・乳白粒・基部未熟粒など）が多く発生し、特に平坦部の「ヒノヒカリ」では1等米比率が大きく低下しました。

しかし、平成23年以降は出穂期から収穫期にかけての気温が平年並かそれ以下となり、高温障害は大きな問題となりませんでした。

令和5年8月17日付大阪管区気象台発表の「近畿地方1か月予報」によると、近畿地方の8月19日から向こう1ヶ月の平均気温は「高い」となる確率が70%で、特に期間の前半は、気温が高くなると予想されています。このことから、「ヒノヒカリ」の登熟期の気温が高温で推移する可能性が高いと考えられます。

出穂期以降、登熟期に気温の高い状態が続くと、白未熟粒などの高温障害が発生する可能性があります。出穂期以降の気温に十分注意し、高温障害を受けないよう、下記のとおり適期に適切な栽培管理を行いましょう。

<これから特に重要となる水管理>

良質な米づくりのためには適切な水管理が欠かせません。移植から分けつ期までの水管理は、保温、肥料の吸収、雑草の抑制等に重要な役割を果たしてきました。これからは、開花及び登熟等を促すためにますます重要となってきます。

水管理による高温障害対策

- 出穂～開花期は、最も水を必要としますので水田の水を絶やさないようにします。出穂から、約30日間は、土が乾きすぎないように注意し、ときどき水を入れます。この時期に水田が乾燥すると、高温障害が発生しやすくなります。
- 高温（特に高夜温）による稲株の消耗が高温障害の発生を助長します。水利の良い田では、開花期以降に掛け流し等の水管理を行い、地温や水温を下げて稲の消耗を抑えることで、品質低下の度合いを減らすことができます。
- 刈り取り作業のしやすさを優先して早期に落水すると、未熟米や胴割れの増加により品質が低下しやすくなります。特に高温下では品質低下が一層助長されますので、収穫作業に支障のない限り、できるだけ落水は遅らせます。

収穫の間際まで稲の活力を維持することが重要です

水管理のイメージ

